

【 3 】

氏名	小川圭治
	おがわ けい じ
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第102号
学位授与の日付	昭和51年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	主体と超越 ——キルケゴールからバルトへ——

論文調査委員 (主査) 教授 武藤一雄 教授 武内義範 教授 辻村公一

論文内容の要旨

本論文の基本的テーマは、いわゆる「主体性」の確立という問題を、主として宗教的見地、なかんずくキリスト教的見地に立って詳細に究明しようとするところである。この問題に関して、宗教改革以後のキリスト教史・キリスト教思想史の展開が精密に述べられ、多くの神学者・哲学者の思想が批判的に検討されているが、本論文の著者が最も力を傾注しているのは、S・キルケゴールおよびK・バルトの思想であり、本書の副題として掲げられているように、「キルケゴールからバルトへ」の展開の必然性を明らかにすることが本書における最も主要な課題をなしている。

学位請求論文として提出された本書は、本書の主題について述べられている「序章」を別にして、第一部「問題状況」、第二部「主体と主体性——S・キルケゴールについて——」、第三部「超越の事実性——K・バルトについて——」、第四部「展望——結論にかえて——」の四部から成っている。各部はまた（第四部を除き）いくつかの章・節に細分され、それぞれ極めて充実した内容をもっている。

「序章」において述べられているように、著者は、「時代の状況の中であって、われわれがひとりの人間として生きぬこうとするとき、主体性の確立こそが、その緊急の課題といわねばならない」とする。著者によれば、真の主体性の確立は、徹底的な自己否定を媒介してのみ達せられるものである。しかるに、現実においては、徹底的な自己否定による主体性の確立という主張が、とどまることを知らぬ他者否定による自己絶対化、一方的な自己肯定に逆転するという自己倒錯を帰結することが稀ではない。特に著者が問題としているのは、近代のいわゆる自由主義神学（新プロテスタント神学とも呼ばれる）における普遍の人間性とキリスト論というがごとき二焦点をもつ楕円の構造をなす神学的思惟が、極めて敬虔な神（またはキリスト）中心主義による主体性の確立を目指すようでありながら、事実上は、神または超越という焦点が、人間または内在の焦点に加速度的に吸収され、消失してしまうという根本的傾斜をもつという点である。それは、究極的には、「神の内在化による人間の絶対化」という理想主義の主観主義的傾斜をもたらすものとされる（第一部第二章）。それは、著者によれば、実は、「主体と超越」の動的弁証法的

緊張関係を喪失した平板な思考にはかならない。著者は、二十世紀初頭の思想史的状況の中で、上述のような事態の新しい突破口が求められたとき、一つの重要な手がかりとなったのが、S・キルケゴールの思想であると考え、本書の第二部「主体と主体性」においては、もっぱらキルケゴール研究に力を傾注している。第二部は、第一章「キルケゴール解釈の問題」、第二章「実存の三段階の構造」、第三章「主体性における内在と超越——『哲学的断片へのあとがき』の構成と主題について——」、第四章「神の前における主体」の四章から成っている。

第三部「超越の事実性——K・バルトについて」は、著者の最も傾倒するK・バルトの神学の詳細な研究である。この第三部は、第一章「バルト解釈の問題」、第二章「神の言葉と実存」、第三章「神学における近代主義の克服」、第四章「神学方法論の確立——アンセルムスの神の存在の証明をめぐる——」、第五章「聖書解釈の方法——R・ブルトマンの問題——」の五章と付論「バルト神学の展開について」とから成っている。

以上の、それぞれキルケゴール研究とバルト研究を詳述した第二部および第三部が、本書の主要部分を形成しており、著者は、そこにおいて、キルケゴールからバルトへの発展の経緯を明らかにするとともに、両者の思想の思想史的意義と特質とを新たに把握し直すことにも大なる努力を払っている。殊に、若きバルトの神学思想の形成について詳論され、彼がキルケゴールの思想との接触によって、その実存的主体性をどのように受けとめたかということが論究されている。著者の基本的見解は、キルケゴールにおいて、超越的主体性への希求が明らかに見られるにもかかわらず、その思想的表現は、主として *fides qua creditur* という主観的側面に集中しており、*fides quae creditur* という客観的側面、すなわち、超越的主体性を超越的たらしめる超越とは何かという問題が十分明確にされておらず、したがって、キルケゴールにおいては、なお近代主義神学の克服が完全には達成されていない所以を指摘するとともに、キルケゴールとの比較において、バルト神学の特色を明らかにしようとするところにある。

第四部「展望——結論にかえて——」は、Ⅰ「実存の主体性から啓示の事実性へ」、Ⅱ「今日の神学的状況」、Ⅲ「与えられた課題」から成っているが、神学思想史的観点から本書の記述を総括し、バルトにおける新しい神学方法論のもつ意義を顕揚しようとする。

以上が、本書の大体の構成と内容の要旨である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、A 5、455頁におよぶ著書として提出されたものであり、著者の過去二十余年間の研究と思索の結実をなすものである。本書は、著者がキリスト教思想史の全般にわたって該博な知識をもつ学究であることを十分に窺知せしめるものであるが、著者が本書において特に取扱っている基本的テーマは、シュライエルマッハー以降の近代神学ないしは宗教哲学の展開およびその限界の問題であり、またその限界を突破するものとしてカール・バルトの神学思想の形成の跡を辿ろうとするものである。本書の書名とされている「主体と超越」は、著者がおよそ人生において、「主体性の確立」ということが喫緊の課題をなし、しかもそれは、一切の内在化を拒絶する絶対的な超越——これを著者は、「神の言」、あるいは「イエス・キリストの出来事」とする——との出会いによって形成される「超越的主体性」においてのみ可能で

あるという著者の根本的思想にもとづいている。「本書が課題として設定し、宗教改革者ルターとカルヴァンが、主観主義と客観主義の危険な分水嶺に立ちつつ目ざしたのは、主観主義と客観主義の対立を越えて〈受肉〉の原理から出発する〈主体と超越〉の動的弁証法的関係を確立することであった」ともいわれている。

著者は、シュライエルマッハー、A・リッチェル、E・トレルチその他の近代の代表的神学者の思惟構造を分析し、それらの神学が、根本的には——シュライエルマッハーにおいて典型的に見られるように——、「普遍的人間性」と「キリスト論」という二焦点をもった楕円の図式によって示されることを指摘し、しかもその際、二焦点——それは主観主義的・内在的焦点と客観主義的・超越的焦点ともいわれる——が一つの楕円の二つの焦点として水平に位置づけられるとき、二焦点は不可避的に反対の側へ接近し、近代神学の場合は、後者（客観主義的・超越的焦点）が前者（主観主義的・内在的焦点）に吸収され、遂には消滅するにいたるとする。これは畢竟するところ、神の内在化による人間の絶対化と無限化にほかならないとされる。著者は、このような近代神学の帰結と限界をみきわめた上で、その限界を突破するものとしてバルト神学を考えるのであるが、いわば近代神学とバルト神学とを媒介する位置に立つものとしてキルケゴールの思想に大きな意義を認める。

それゆえ、本書は、バルトの思想形成に対して、キルケゴールの思想が果たす役割、または影響の仕方の究明という一種の比較思想史的研究の問題を含むといわれる。著者は、本学文学部哲学科に在学中からキルケゴールの思想に沈潜し、本書におけるキルケゴール研究の部分、あるいはキルケゴールとバルトの関係等について論じた部分は、著者の卒業論文「絶対者に対する絶対的關係——キルケゴールについて——」（1951年3月）を出発点とし、スイスのバーゼル大学神学部に提出したドクター論文“Die Bedeutung und Grenzen der Kierkegaard-Renaissance in Deutscher Sprache”を頂点とした研究成果を踏まえて書かれた諸論文を基礎として成立したといわれる。とにかく、著者のキルケゴール研究が、本邦における類書の水準を抜きんでた極めて高度なものであり、欧米のすぐれたキルケゴール研究書に比しても遜色のないものであることは疑を容れない。著者はデンマーク語をよくし、キルケゴールの多くの著作をデンマーク語原典全集によって読みこなし、ドイツ語圏のおびただしい研究書のみならず、またデンマーク語で書かれた研究書をも十分に参照している。特に第二部第一章の「キルケゴール解釈の問題」は、著者のキルケゴール研究の方法論を明らかにした力作として、それに対する賛否如何を問わず、およそキルケゴール研究者の看過すべからざる重要な意義をもつであろう。なお、著者の提唱する方法は、H・ディームやG・マランチュクの研究によって影響を受けているというところが多いようであるが、要するに、文献学的・歴史的研究と実存弁証法による主体的解釈との相関、つまり、思想家の人間とその思想の相関を厳密に追求するという点にあるといえるであろう。

著者が、その綿密なキルケゴール研究を踏まえた上で、なおキルケゴールに対して提示する根本的な問いは、彼が果して、上述のごとき、主観主義的・内在焦点と客観主義的・超越的焦点という二つの焦点をもった楕円の図式を根本的に克服しているか、いかえれば、真の超越との出会いによる真の主体性の確立という課題が完全に遂行されているかということである。著者が「キルケゴールからバルトへ」と赴くのも、この課題の解決をバルトにおいて見出しているからにほかならない。

第三部「超越の事実性」は、もっぱら著者が、スイス留学の時期に直接師事したカール・バルトの神学の研究成果を示すものである。著者は、バルトがキルケゴールの問題を真摯に受けとめながら、その実存思想と対決し、およそ神学の近代主義的形態を克服し、著者のいわゆる「二焦点的弁証法」ないしは「二元論的弁証法」ならぬ「信仰の類比」(analogia fidei)による動的弁証法を明らかにし、かくて真に現代神学の新たな開拓者となったことの劃期的意義を強調する。第三部第四章「神学方法論の確立——アンセルムスの神の存在の証明をめぐる」は、バルトがその神学方法論を確立したといわれる彼の名著 *Fides Quacrens Intellectum——Anselms Beweis der Existenz Gottes im Zusammenhang seines theologischen Programms*, 1931 (知解を求める信仰——アンセルムスの神学のプログラムとの関連における彼の神の存在の証明) についての詳細な研究であって、著者のバルト理解の深さを強く印象づける。この章において、著者はバルトとともに思索しつつ、いわゆる神の存在の存在論的証明についての中世から近代にいたる様々の論議について、D・ヘンリッヒの著作 *Der ontologische Gottesbeweis*, 1960 を参照しながら、すぐれた解説を行なっている。

著者のバルト理解はきわめて透徹したものであり、初期バルト神学の形成から、『知解を求める信仰』にいたるまでの彼の神学の展開を丹念に追跡したものととして、本書におけるバルト研究は、それだけを独立して考えても、第一級のバルト研究書たる実を備えているといえる。また同様のことは、著者のキルケゴール研究についても妥当するであろう。

しかし、本書の欠点とみなされるのも必ずしもすくなくない。例えば、いわゆる「二焦点の楕円図式」が、究極的には、人間中心主義または内在主義に転落するという帰結については、多くの歴史的例証が挙げられてはいるものの、真に説得的な本質的論拠が示されているとはいいい難い。また著者のバルト神学に対する傾倒は首肯しうとしても、著者がバルトの立場と全く同調して、多くの神学者・哲学者に対して行なっている批判には、必ずしも正鵠を射たものとはいいい難い点が見受けられる。さらに著者がその思想を表現するに当って、十分に適切とはいいい難い措辞を用いている場合も散見される。

しかし、上述のような欠点があると思われるにもかかわらず、本書の基本的趣旨には、傾聴すべきものであり、日本のキリスト教学界に対して大きな刺戟を与え、貢献をもたらしたことについては疑うべからざるものがある。本書の中核を形成するキルケゴールおよびバルトの研究は、きわめて高度の水準のものであり、既述のように、それぞれ独立した別個の研究としてもすぐれた価値を有するものとみなされるものであるが、著者の試みた両者の比較思想史的研究にいたっては、何人も容易に企て得ざる大なる学問的業績として評価さるべきであろう。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。